

縄田裕幸（2008年度日本英語学会研究奨励賞受賞）

このたび、拙論に対し2008年度日本英語学会研究奨励賞を頂き、大変光栄に存じます。多くの助言や励ましをいただいた選考委員の先生がたには心より感謝申し上げます。

今回受賞した論文は、英語史における動詞第二位（V2）語順の消失を動詞屈折接辞の衰退によって説明することを試みたものです。動詞屈折の豊かさと顕在的動詞移動の関係については、従来V-to-I移動に関して多くの研究が行われ、広範な言語において相関が認められることが知られています。翻ってV2移動については、そのような関係はこれまでほとんど指摘されてきませんでした。V2移動が基本的に主節に限られることや、動詞屈折が衰退した現代英語でもある種の構文で残余的なV2語順が生じることなどが、動詞屈折の豊かさとV2移動の関係を見えにくくしているものと思われます。しかし英語の史的事実を子細に観察すると、両者の間にははっきりとした相関があることが分かります。私はこの論文で、動詞が弁別的な複数一致形態素を保持している場合にV2移動が生じることを指摘し、その事実をRizziにより提案された細分化されたCP構造と分散形態論の理論的枠組みによって分析しました。

V2移動が動詞の豊かな屈折に関係しているというこの論文のアイデアの萌芽を、私は博士論文で扱いました。しかし当時の分析は、私自身決して満足のいくものではありませんでした。以降、断続的にこのテーマを扱ってきましたが、現時点で最適と思われる分析を提示しておきたいと考え、この論文を執筆しました。受賞という形で認めていただいたことにより、長年の宿題に答えを出すことができたような気がしています。また、私はこれまでの研究で英語の通時的変化の分析によって共時的な言語理論の構築に貢献することを目指してきましたが、その点を評価していただいたことを大変うれしく思います。

大学院の門をたたいて英語学の道を志した当時、自分は果たして一人前の研究者になれるのだろうか、大きな不安を抱いていたことを思い出します。ましてや、このような賞をいただけたとは思いませんでした。恩師の中野弘三先生や故天野政千代先生をはじめ、これまで私を支えてくださった多くの方に感謝を捧げます。今回の受賞を励みとし、それに恥じぬような研鑽をこれからも積んでいく所存です。ありがとうございました。